

地理学史年表作成について

栗原尚子

ここ数年来、日本地理学会の地理学史研究集会に参加し、学説史の勉強を続けてきた。研究集会は、2年前より作業グループに切り替り、その主要目的は、学説史の研究を深化させるとともに、もう一方で日本の近代地理学の年表を作成するという事になった。

地理学史の年表については、先達の優れた学説史研究の巻末に付されたものがあるが、詳細な年表作成のみを対象とした事は未だ無い。学説史の研究にとって、詳細かつ正確な年表は基本となるが、我々は利用しうるようなそれを持ち合わせていないのである（竹内啓一・源昌久「明治前期地理学史年表の作成の意義と方法」日本地理学会予稿集 31 1987年 230頁参照）。ともかく初めに、幕末から明治20年代までの年表作成を手掛けようということで、この仕事に乗り出しはしたものの、今後の作業量を思うと、私などは気が遠くなる思いである。

まず年表作成は既存の資料の切り張りのできるものではない。一つ一つの事項について、原史料に当たりそれぞれの書誌学的検討が必要とされる。明治20年代までを対象とする学説史の意義は、近代地理学が制度的に確立される以前の状況を明らかにする点にある。近代地理学がいかに制度化institutionalizationされたのかに大きな関心があるからである。しかし、この時期は、日本そのものが近代国家として制度的に確立される以前でもあり、そのような状況のなかで地理学の研究・教育史を明らかにするのは容易なことではない。原資料を書誌学的に検討するといっても、現存の原資料そのものが非常に限られ、新たに掘り起こしていくには多くの時間と労力を必要とする。とはいうものの、ともかくこの共同研究に取り組むにあたってまず基本となるであろういくつかの柱、教育および関連の制度史

・地理教育・主要な地理学者とその業績・外国人教師・近代的な地図の作成等である。その中で、大学院修士の石川敦子さん、福嶋依子さんの協力のもとに、私達がまず取り組むことになったのは、明治10年代における地理の初等教育において注目される若林虎三郎とその著作『改正教授術』（白井毅との共編纂）である。

『改正教授術』および若林虎三郎については、中川浩一氏の優れた研究があり、『近代地理教育の源流』に詳しい。『改正教授術』は、ペスタロッチ主義教授法による開発主義地理教授法の実践書として、地理学史のみならず教育学史においても高く評価されている。従来暗記中心の教授法に代わり、自然の観察を通じて生徒の地理観を養うことを試みたものであり、自然観察の可能な空間スケールをこえる空間については地図の利用の重要性を説き、いわゆる同心円的地域認識の先駆的教授法としても注目されるものである。多くの賛同者をえて一時は当時の教育界を席卷した。

中川氏の研究を踏まえ、まず若林虎三郎がどのような人物であったのか、なぜ地理教育に関心を抱くようになったのか関心は尽きることはないが、まず彼の略歴を調べることから始めた。しかし、彼が奉職していた東京師範学校付属小学校の資料を保管する現筑波大学にも死亡届けが残されているのみであり、その他の糸口もいまのところ新たな成果を得るに至っていない。

今回このような文章をここに載せていただくことを考えたのは、一つには多くの方がこの共同研究に参加して下さることを希望するのと同時に、若林虎三郎に関しての情報を集めたいという趣旨からです。どのようなことでも構いません。いろいろ御教えいただければ幸いです。